

上顎犬歯の舌面に出現した異常結節の 1例について

伊藤 一三 藤村 朗
阿部 真裕 野坂 洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座* (主任：野坂洋一郎教授)

[受付：1982年5月15日]

抄録：20才男性の口腔診査時に、上顎犬歯の舌面に、異常結節を認めた。この個体の歯牙は日本人平均値より大きかった。本症例の過剰結節の出現は Cingulum 由来と考えたい症例である。

I 緒 言

ヒトの歯冠形態は各歯牙で一定しているが、異常結節がしばしば現われ、これに関する報告例も多い。しかし、その発生原因に関しては、定説をみないのが現状であり、形態的意義のわかっているものは少ない。¹⁾ 結節によって、発現部位、歯種、頻度は様々であるが、特に犬歯の歯冠形態異常は、稀なものと考えられる。今回、我々の遭遇した上顎犬歯の舌面の異常結節についての所見とその意義について報告する。

II 症 例

本○法○, 20才, 男性

家族歴：上顎右側犬歯の異常は萌出当時より気づき、父母兄弟を調べたが、家族には異常が認められなかった。特記すべき事項はないと考えられる。

既往歴・現病歴：気管支ゼンソクで時に発作があるが軽度である。

全身所見：体格良好、顔貌も普通で左右対称で異常を認めない。

口腔内および歯牙所見：口腔粘膜および舌の色沢など、正常である。咬合関係は、大白歯部のみ咬合し、小白歯および前歯部は、咬合せず特に上顎歯列の犬歯、前歯は、唇側傾斜が強く、開咬状態が著しい。したがって下顎前歯部は咬耗、磨耗が少なく、切端結節が明瞭に認められる。Ober Jet は6.25mmと強度であり、上下顎歯列正中のずれは、下顎が右側に4.13mm ずれている。歯牙の現有歯数は表1の如くである。上下顎左右の第3大白歯は未萌出であり、下顎左側第2大白歯は欠損し、第1大白歯が遠心移動して、第2小白歯との間に空隙が生じている。一見すると、第1大白歯の欠損を思わせるが右側の大白歯の形態と比較すれば、第2大白歯の欠損が明らかである。歯列における各歯牙の大きさの計測値は表2に示す如くである(石膏模型上の計測値である為、歯冠長径は臨床歯冠のみで参考程度である)。歯冠幅径および厚径においては、日本人男性の平均値²⁾ よりいずれの歯牙も0.5~1.0mmの範囲で大きい値を示す。ただし例外として下顎第2大白歯のみは歯冠幅

A case of abnormal tubercle appearing on the lingual surface of the upper canine

Ichizoh ITOH, Akira FUJIMURA, Masahiro ABE, and Yohichiro NOZAKA

(Department of Oral Anatomy, Iwate Medical University School of Dentistry, Morioka 020)

*岩手県盛岡市中央通1-3-27 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 7 : 145-149, 1982

表1 現有歯牙とその状態

未萌出 8	7	C ₁ 6	5	4	C ₁ ③	支台C ₄ 2	C ₃ 1	C ₃ 1	C ₃ 2	3	4	5	C ₁ 6	7	未萌出 8	
8 未萌出	7	6	5 C ₂	4	3	2	1	1	2	3	4	5	空 隙	6 遠心移動	7 欠損	8 未萌出

○印：異常結節を有する歯牙

表2 各歯牙計測値

測定部位	歯種	7 6 5 4 3* 2 1 1 2 3 4 5 6 7															
		幅	径	10.10	11.60	7.33	8.24	8.42	—	9.20	9.27	—	8.54	8.11	7.40	11.64	10.52
厚	径	12.76	12.35	9.83	10.24	9.08	—	7.29	7.33	6.93	8.88	10.11	9.95	12.42	12.81		
長	径	6.32	6.41	6.70	8.21	10.10	—	10.58	10.62	9.05	9.98	8.55	6.70	6.22	6.18		
本○法○ δ 20才	幅	径	10.81	12.35	7.54	7.51	7.52	6.32	5.62	5.68	6.47	7.32	7.66	8.05	12.57	×	
	厚	径	10.05	11.12	8.68	8.24	8.03	6.86	6.40	6.66	6.87	7.89	8.22	8.80	11.00	×	
	長	径	4.35	6.41	5.98	8.00	10.10	8.92	8.20	8.21	9.40	10.53	7.72	6.93	6.00	×	
日本人平均値 δ (上條) ²⁾	幅	径	10.0	10.6	6.86	7.30	7.85	7.97	8.38								
	厚	径	11.4	11.3	9.08	9.34	8.24	6.42	7.01								
	長	径	6.8	6.6	7.22	7.99	10.09	9.39	10.77								
	幅	径	11.1	11.6	7.11	7.00	6.92	5.93	5.33								
	厚	径	10.5	10.7	8.35	7.77	7.84	6.09	5.64								
	長	径	6.6	6.9	7.26	8.15	10.29	8.64	8.38								

* 過剰結節を有する歯牙
 × 喪失歯
 — 計測不能 単位 mm
 上段が上顎歯, 下段が下顎歯

径で0.29mm, 厚径で0.45mm小さい。左右側別では, 上顎右側第1小白歯と下顎右側犬歯を除いて, 右側は左側より歯冠が小さい。

歯冠形質に関する所見：上顎右側犬歯の異常結節のほか上顎左側犬歯も舌面中央隆線の発育がよく尖頭が鋭く突出している。下顎の左右側犬歯も, 舌面中央隆線, 近遠心辺縁隆線の発育が著しい。その他, 上顎中切歯も辺縁隆線の発育がよくシャベル型を呈し, 大白歯では, Protostylid や Carabelli 結節は認められないが, 下顎第1大白歯で左右側とも第6咬頭が出現している。

異常結節所見：

1. 肉眼的所見：上顎右側犬歯の舌面中央部すなわち, 舌面中央隆線が著明に膨隆して, 舌面歯頸隆線と一連続をなし本来の舌面窩は消失している。この隆起は切端側に円錐状に突出し, 大きな結節となり, 本来の尖頭の舌側にもう1つ尖頭を形成している。結節は頂

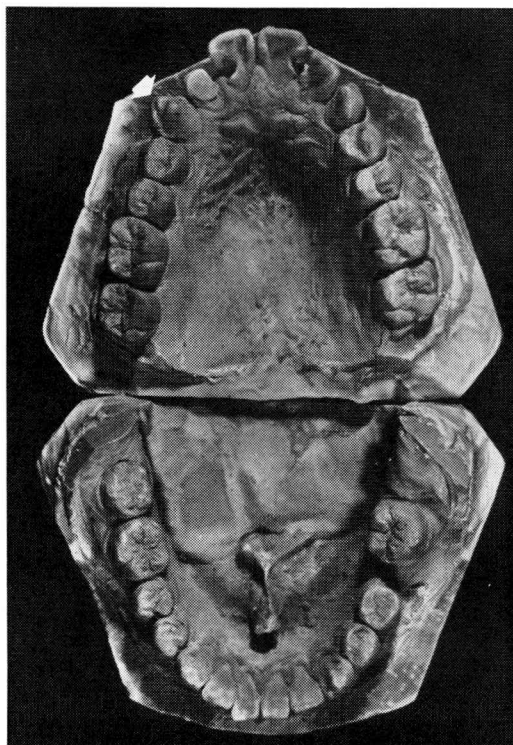


図1 全顎模型(矢印：異常結節を有する上顎右側犬歯)

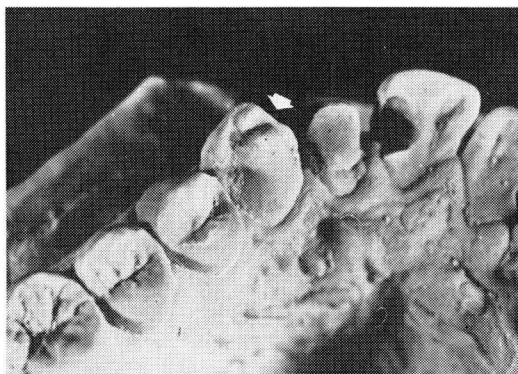


図2 異常結節（上顎右側犬歯）

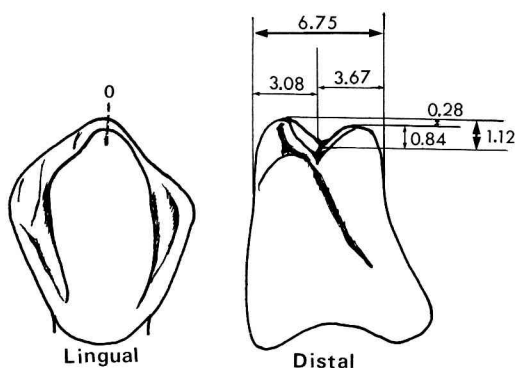


図3 異常結節を有する上顎右側犬歯
（結節の大きさ）

部がわずかに咬耗し、Dentinの黄色が円形状に透過して認められる。この詳細は、図1, 2, 3に示す如くである。この結節の計測値は犬歯は上下左右とも日本人男性平均値²⁾より、いずれも大きい。特に異常結節のみられた上顎右側犬歯は歯冠幅径で0.57mm、歯冠厚径で0.84mm大きい。左側の犬歯と比べても厚径で0.20mm大きい。

異常結節は結節頂部で近遠心径3.51mm、頬舌径3.67mmである。高さは尖頭と境している溝より0.84mmで本来の尖頭より0.28mm低い。（図3参照）。

2. X線所見：歯頸部付近、すなわち、舌面歯頸結節に一致するところより発し、舌面中央隆線とほぼ一致して発育し、この膨隆および尖端の結節を示す不透過像の中に歯髓腔らしい透過像は認められない。

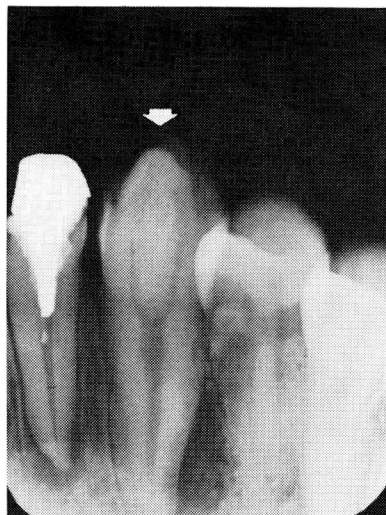


図4 X線像（矢印：異常結節を有する上顎犬歯）

Ⅲ 総括ならびに考察

過剰結節に関する報告例は多く、多種多様の形態を示している。切歯部では唇面に付加的に生ずる結節と舌面に棘突起や基底結節などが発育してできるものがあり、臼歯部では頬舌面の付加結節と咬合面の異常結節がみられる。しかしながら、犬歯においては比較的異常が少ないといわれ、報告例も少ない。

M. de Terra³⁾は切歯および犬歯の舌面基部に発現する小結節をそれぞれ、Incisorenhöcker, Basalhöckerと名づけており、その他、同様の小結節について、Busch⁴⁾, Hjelmman⁵⁾, らが述べている。藤田⁶⁾も切歯および犬歯の舌側面において基底結節の発育が良好で周囲より、盛上がっているものを、切歯結節および犬歯結節とよんでいる。しかし、棘突起の発達したものとの間には、はっきりと境界をつけることは不可能であるとしている。馬⁶⁾は正常歯でも多少膨らんでいるので、このような現象の頻度を正確な数字で比較することは不可能であるとしている。先人の報告をみると切歯に比べて犬歯の場合は、本症例の如く、尖頭とほぼ同位まで発育し小臼歯化した例は極めて稀といえる。上顎の犬歯結節については、松尾⁷⁾、西塚⁸⁾,

横田⁹⁾, 脇屋¹⁰⁾, 坪田¹¹⁾らが, 下顎の犬歯結節については, 北條¹²⁾が両側性に出現した例を報告している。

成因については, Busch⁴⁾は2個の発育途上の歯胚が極めて接近して存在することによって, 原因はわからないがそのうちの1個の原基が発育不良の経過をとり, 正常な発育経過をたどったものに付加的に癒着したものであるとしている。これに対し柴田¹³⁾は頬舌面の歯頸隆線の発育にその成因を求めており, この説と同様に近年過剰結節の由来をCingulumに求める説が有力である。藤田¹⁴⁾も基底結節は臼歯の舌側結節に相当するものでCarabelli結節はテナガザルの歯帯結節の遺残であると述べている。また, 弓倉¹⁵⁾は舌面歯頸隆線とは別個に発育し, 歯髓の一部が伸びて結節の先端まで達している臼歯部の異常結節について切歯部の中心結節のX線像は臼歯部のそれとは全く像を異にし, 歯冠部歯髓腔の中にさらに硬組織が存在するように見える。換言すれば, 歯内歯と関係のあることも考えられる。本症例は, 上顎右側犬歯の舌面に出現した大きな異常結節であるが,

この他の犬歯すなわち, 上顎左側犬歯, 下顎左右側犬歯の舌面中央隆線の発育が著明なことや, 異常結節が舌面歯頸隆線から連続してみえること, またX線所見においても, 歯頸部および辺縁隆線と関連して発生していることから考えてこの症例の異常結節の由来をCingulumに求めることが一番自然である。しかし, 同一の機序で出現する, Cingulum由来のCarabelli結節や, Protostylidなどは本症例の個体の歯牙には全く認められず, この出現頻度は比較的高いのに比べ, 犬歯での異常は非常に稀であることなどから, 歯牙の退化傾向や過剰歯の出現率などのちがいと同等に歯種独特のものであろう。

IV 結 論

1. 上顎右側犬歯舌面に異常結節を有する20才の男性の口腔内診査及びX線, 石膏模型での観察をおこなった。
2. この異常結節はCingulum由来と考えられるが, 詳細については不明な点が多い。

Abstract: Our report was based on the anomalous case of an upper canine with an abnormal tubercle of a 20-year old male.

The development of the crowns of the remaining teeth is normal.

However, the upper right canine is abnormal.

It seems to be fact that this tubercle would be originated from the cingulum.

文 献

- 1) 藤田恒太郎, 桐野忠大: 歯の解剖学, 第19版, 金原出版, 東京, 152-154, 1974.
- 2) 上條雅彦: 日本人永久歯の解剖学, 第2版, フナトーム社, 東京, 229, 1968.
- 3) Terra, M. de: Beiträge zu einer Odontographie der Menschenrassen, Zurich, 235-237, 1905.
- 4) Busch, W.: Über Verschmelzung und Verwachsung der Zähne des Milchgebisses und des bleibenden Gebisses, Deutsche Monatsschrift für Zahnheilkunde, Heft 11, 469-486, 529-544, 1897.
- 5) Hjelmlan, G.: Morphologischen Beobachtungen an den Zähnen der Finnen, Helsinki, 20-21, 1928.
- 6) 馬 朝茂: 日本人の歯における形態のおよび数的異常の統計的観察, 歯科学雑誌, 6: 248-256, 1949.
- 7) 松尾兼次: 最近5カ年に蒐集したる先天的異常発育歯に就いて, 日歯学会誌, 23: 417-427, 1930.
- 8) 西塚忠義: 邦人歯牙に見たる載歯結節並に基底結節に就きて, 臨床歯科, 7: 444-449, 1935.
- 9) 横田 亨: 犬歯における歯牙結節の1症例, 歯科月報, 18: 569-572, 1938.
- 10) 脇屋和夫: 上顎前歯に現われたる歯牙結節の6例に就て, 歯科学報, 44: 465-472, 1939.
- 11) 坪田不二雄, 弦巻彩子: 上顎側切歯および犬歯に現われた基底結節の1例, 歯学, 49: 126-128, 1961.

- 12) 北條吉雄：人類下顎兩側犬歯舌面中央ヨリ發現セル大ナル異狀結節ニ就テ, 口病誌, 13 : 326-328, 1939.
- 13) 柴田 信：歯牙形態学, 3版, 金原出版, 東京, 342, 1932.
- 14) 藤田恒太郎：哺乳類とくに人類の歯の系統發生, 解剖誌, 33 : 89-94, 1958.
- 15) 弓倉繁家, 吉田建士：人類小白歯咬合面に發現せる咬合面中央異常咬頭結節, 口病誌, 10(1) : 73-83, 1936.